

これからの行事 (3月の行事)

- 4日 事務局会議 (22)
- 8日 コミ主事連絡会
- 10日 お灸の講習会 10:00 コミセン
- 12日 海星中卒業式
- 17日 地域内清掃 8:00
- // サロン食事会
- 18日 事務局会議 (23)
- 20日 サロン体操
- 22日 長浜小卒業式

コミ協総会は4月21日です。

西山地区
コミュニティ協議会だより

【(西風) 令和5年度3月号】

発行：西山地区コミュニティ協議会
会長 中村史傳
令和6年3月8日発行
薩摩川内市下飯町瀬々野浦 1194
TEL 09969-5-0122
FAX 09969-5-0355

コミュニティブランド市開催

2月11日川内運動公園で、薩摩川内市コミュニティブランド市が行われました。

ブランド市にコッパン餅と草餅、テングサ、切干し大根、ツワん干し葉をもつて出店しました。コッパン餅80個は午前中に完売、草餅60袋は5、6袋を残して売れました。テングサ、切干しなどは調理せねばならない故か売れ行きがはかばかしくありません。

ブランド市全体での一番人気は某地区の団子で開店早々長蛇の列となります。手間をかけずにすぐ食べられておいしいと評判の品が売れ筋のようです。草餅、コッパン餅は「あぶる」というひと手間があります。昔ながらの素朴な味が受けるのかもしれない。文化フェスの方は各コミのサークル活動として行われる太鼓、舞踊、合唱、社交ダンス、健康体操なども披露されて参考になりました。



講演会は元女子バレーボール前本選手の迫田さおりさんの講演は帰りの船の時間の都合もあって聞けませんでした。

春を競う木

キブシ対アオモジ

昔から春を感じるものは数多くありますが、目よりにある「キブシ」と「アオモジ」が野山に目立つようになり、ようやく春が来たと感じるようになりました。



キブシ



アオモジ

そして昔からアオモジは「ホローゼ」という現地名があるのに対しキブシはそのままの標準名でいいます。大概の人がアオモジのほうがきれいだと思っています。そしてアオモジは京都のもち菓子についている同類のクロモジ楊枝の代用に使われることもある香りのよい幹を持ち合わせています。キブシは今年2月20日過ぎから目立ってきました。対しアオモジは3月はじめごろからです。このころはキブシの花は下の方から黒ずんできません。盛りを過ぎたキブシとまっさかりのアオモジを比べるとキブシがかわいそうです。キブシも春を代表する綺麗な花であることを皆様もどうぞ分かってあげて下さい。

二つの工事が年度末を迎え
完了まじかです。



一つは薩摩川内市飯島振興局発注の市道西部一号线道路改良工事。谷山(タノヤマ)登山道入り口付近。工期は令和5年8月31日〜令和6年3月12日まで。



もう一つは薩摩川内市林務水産課発注の瀬々野浦漁港水産物供給基盤保全工事。工期は令和5年11月27日〜令和6年2月20日まで。どちらも検査待ちの状態みたいです。

皆様ご協力ありがとうございました。

シリーズ12 故郷を深く浅く探る

三月ん節句 中村史傳

節句は「せつく」と読むが、シンヌーラフウでは「せく」という。

昭和30年代までは多くの「せく」があり守り伝えた。その中の「三月の節句」は、草餅と白餅を搗いた。ここでいう三月とは旧暦三月三日で、太陽暦では四月初旬から中旬ごろである。

このころの潮は干満差が大きくイチビヨのアタイロから黒瀬まで歩いていけるのではないかと思うくらい潮が引く。大潮となる三月三日が「さんがつんせく」である。子供は白餅をもらい鍋を下げてハトやイチビヨの磯に出かける。磯でミナヤケ(ヨメガカサ)を拾い、すっかりすり切れてなくなりそうなアメノイ(甘海苔)やコブノイ(フノリ)、フシギ(モズクの仲間か?)を採って鍋に入れる。トウの立ち始めたフダン草の葉を磯に行く途中の畑から持ってきて、これを鍋に入れて、丸餅とともに鍋に入れる。気のきいた者はやかに真水を入れてきて、真水と海水で調節して味よく炊くが、多くはホネヒューシ(骨惜しみ・怠け者)で、塩水で炊く。塩で炊いた雑煮は塩辛いことこのうえなく、ドロドロに溶けた餅と海藻と具類のダシ

のおりなす味は何とも言い難い。

今日われわれの世代に高血圧が多いのは、このことに起因するのではないかと思うが、この塩味のききすぎた雑煮は男料理の原点でもあった。

というのも三月ん節句は、男は男で、女は女でグループをつくり、男女混合グループはなかった。そして、積極的に磯に鍋さげていったのは男が多かったように思う。

こんにち、三月三日の節句、すなわち「ヒナ祭り」女だけの祭りになったような感がある。

かつて厄やケガレを「ヒトガタ(人形)」に移して川に流した「流しヒナ」が今日のヒナ飾りになったといわれる。

この厄落とし、ケガレ除けとともに野外で飲食の習慣があったらしい。その名残りが故郷の「さんがつんせく」だったのだ。

子供の頃流木の薪の火付けにマッチを何本すったことか。南蛮通目のセーガセまで行けたイチビヨが今は石跳びが恐くて一時間近くを要する。

幼い日は遠くはるかなむかしとなつた。



イチビヨのアタイロ
タカセ